

---

[成果情報名] 水稲「実りつくし」の収量、外観品質が優れる収穫適期

[要約] 「実りつくし」の収穫適期は、出穂期後積算気温が970～1,190℃で、収穫早限期の黄褐色籾比率は70%である。収穫適期の籾水分は22～26%で、早刈りをすると青未熟粒の混入により品質低下につながる。

[キーワード] 実りつくし、収穫適期、出穂期後積算気温、籾水分、黄褐色籾比率

[担当部署] 筑後分場；水田高度利用チーム、農産部；大豆・品質チーム

[連絡先] 0944-32-1029

[対象項目] 水稲

[専門項目] 栽培

[成果分類] 技術改良

---

[背景・ねらい]

水稲新品種「実りつくし」は、「ヒノヒカリ」に比べて多収で、外観品質および食味が安定して優れることから、中食・外食向けとして期待されている。水稲の収穫適期は、品種により異なり、収穫時期の違いによっても収量、品質が変動する。このため、今後の「実りつくし」の作付推進にあたっては、本品種の特성에対応した収穫適期を明らかにすることが重要である。

そこで、収量が多く、外観品質が優れる「実りつくし」の収穫適期とその判定指標を明らかにする。

(要望機関名：水田農業振興課 (H26、H27))

[成果の内容・特徴]

1. 「実りつくし」の収量、外観品質から判断される収穫適期（精玄米重歩合が93%以上に達し、検査等級が1等規格）は、出穂期後積算気温（日平均積算気温）970～1,190℃の時期である（図1）。
2. 「実りつくし」は、出穂期後積算気温が970℃未満の早刈りでは精玄米重歩合が低下し、青未熟粒の混入により検査等級が低下する。また、出穂期後1,190℃以上の遅刈りでは乳白粒の発生が多くなるため、検査等級が低下する（図1、表1）。
3. 収穫適期の出穂期後積算気温970～1,190℃から判断される適正な籾水分は22～26%であり、黄褐色籾比率が70%に達した時期より収穫を開始できる（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 「実りつくし」の収穫適期判定指標として、栽培技術マニュアルに掲載し、普及現場で活用する。
2. 「実りつくし」の出穂期後日数（出穂～成熟期）は、41～50日間と年次間変動が大きいため、出穂期後積算気温と籾水分を中心に収穫適期を判断する。

[具体的データ]

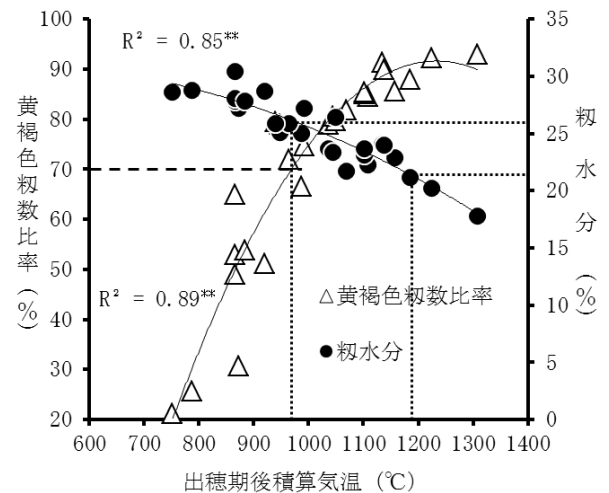
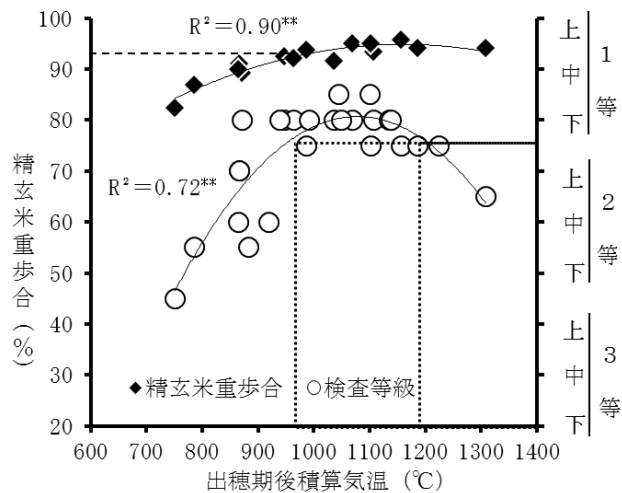


図1 出穂期後積算気温と精玄米重歩合、検査等級との関係

図2 出穂期後積算気温と黄褐色籾比率、籾水分との関係

- 注) 1. 平成27～28年産の農産部、筑後分場のデータを使用(以下、同じ)。ただし、精玄米重歩合のデータは筑後分場のみ(篩目は1.85mm)。  
2. \*\*は1%水準で有意(以下、同じ)。

表1 刈取時期別の検査等級および外観品質(筑後分場)

年次	刈取月日(月・日)	出穂後日数(日)	成熟期との差(日)	出穂期後積算気温(°C)	検査等級	格付理由	整粒歩合(%)	白未熟粒割合(%)	青未熟粒割合(%)
H27	10. 8	35	-15	786	5.5	青未熟	68	3	17
	. 13	40	-10	872	3.0		76	2	9
	. 19	46	-4	987	3.5		77	2	6
	. 23	50	±0	1069	3.0		78	3	3
	. 28	55	+5	1157	3.5		78	5	1
H28	10. 3	34	-9	895	5.0	充実不足、青未熟	55	6	12
	. 7	38	-5	997	3.0		68	6	6
	. 14	45	+2	1096	3.5		72	10	3
	. 18	49	+6	1234	3.5		70	12	1
	. 24	55	+12	1318	4.5	乳白	64	14	1

- 注) 1. 供試品種：実りつくし。窒素施肥法(基肥+穂肥Ⅰ+穂肥Ⅱ:kg/10a)：3+2+1.5。  
2. 移植時期(出穂期)：平成27年6月18日(9月3日)、平成28年6月21日(8月30日)。  
3. 成熟期は、黄褐色籾比率80%に達した日。  
4. 検査等級は、1等上(1)～3等下(9)の9段階。  
5. 整粒、白未熟粒(乳心白、基白、腹背白)および青未熟粒(青未熟、青死米)の割合は、穀粒判別器(サタケRGQI20A)による粒数割合。

[その他]

研究課題名：水稻新品種「実りつくし」の高品質・安定多収栽培技術の確立

予算区分：経常

研究期間：平成28年度(平成27～28年)

研究担当者：佐藤大和、内川 修